

# “Der Ackermann aus Böhmen”における過去 時制について

## —作品解釈のひとつの視点として—

工 藤 康 弘

1. ドイツ語では過去の事象を表現する際、過去形および現在完了形という2つの形式が用いられる。本稿では“Der Ackermann aus Böhmen”<sup>1)</sup>における過去形と現在完了形の用法を、主としてHarald Weinrichの理論を援用しながら考察していきたい。WeinrichはSprechhaltungの観点から時制を2種の時制群、すなわちBesprechenの時制（現在形、現在完了形、未来形、未来完了形）およびErzählenの時制（過去形、過去完了形、条件法I、II）とに分けた。<sup>2)</sup>両者の機能は緊張と弛緩という言葉に集約される。すなわちBesprechenの時制を用いることによって、話者は聞き手に緊張して聞くことを促す。逆にErzählenの時制の場合はリラックスして聞ける。<sup>3)</sup>以下においては、作品全体における過去形と現在完了形の分布状況を考察しながら論を進めていきたい。なお、作品名は『アッカーマン』、現在完了形は完了形と略記する。

2. 1400年頃の作品『アッカーマン』は、死神によって妻マルガレータの命を奪われた農夫が、死神と論争するという形式で書かれている。作品は最後の祈りの部分を除いて33章に分かれている。第1章では農夫が陳述を行ない、これに答えて第2章で死神が発言し、以下交互に論争が繰り返され、第33章で神が判断を下すという構成になっている。このようなことから、『アッカーマン』における過去形と完了形の分布は各章ごとに記述していくのが適当であろう。その際、両時制が共に現われる章とどちらかが欠けている章とに、便宜的に分けて考えていきたい。

2.1 ここでは過去形と完了形が共に現われ、関連してくる章を見ていく。各章における両者の分布の仕方には次のようなものが見られる。Prät.は過去形、Perf.は完了形を表わし、数字は該当する章を示す。

Perf.—Prät.—Perf. (3, 7, 9, 19, 20, 21)

Prät.－Perf.－Prät.	( 5 , 30)
Perf.－Prät.	( 4 , 11, 13, 27, 29)
Prät.－Perf.	(12, 24, 33)
その他	(14, 16, 17, 18)

上の表でたとえば Perf.－Prät.－Perf. は、最初に完了形が現われ、次に過去形が現われ、しかる後に再び完了形が現われるという形で、章全体が展開していくことを示している。従って、たとえば完了形の文がいくつか現われ、その間に過去形の文が入ってこなければ、Perf. としてまとめられている。その際、完了形の文が連続して現われる場合も、また距離を置いて現われる場合も、等しく Perf. で表わされている。以下においては、上に挙げた各パターンごとに検討していくが、同時に Besprechen と Erzählen の時制群全体の分布状況をも合わせて見ていきたい。

#### 2. 1. 1 Perf.－Prät.－Perf.

	Perf.	:	Prät.	:	Perf.
3 章	4	:	3	:	1
7 章	1	:	1	:	1
9 章	4	:	7	:	5
19章	3	:	1	:	1
20章	1	:	1	:	3
21章	2	:	2	:	1

ここで留意すべきことは、両時制の両時制群に対する関係である。すなわち Besprechen の時制群では、完了形と並んで現在形も大きな比重を占めている。一方、Erzählen の時制群で中心的な位置を占めているのは過去形だけである。従って完了形の数にかかわらず、完了形が現われる箇所の周辺には現在形も多く、広範な Besprechen を形成している。これに対して過去形の場合は、他の時制と相俟って Erzählen を形成することはほとんどない。従って、3 章や 9 章には比較的まとまった Erzählen が現われているが、他の章では Besprechen のコンテキストに過去形が孤立して現われている。以上のことから Besprechen を B、Erzählen を E で表わせば、Perf.－Prät.－Perf. のパターンを示す章は、時制群全体としては B または B－E－B という構成を示すと言える。

### 2. 1. 2. Prät. — Perf. — Prät.

5章における過去形と完了形は1 : 5 : 1の割合で分布している。2つの過去形はいずれも、章全体にわたる Besprechen の中で孤立している。一方、30章における両時制は5 : 1 : 3の割合で分布している。完了形は1つしかないが、現在形と共に Besprechen のコンテキストを形成している。また、章の冒頭と最後の部分は現在形を中心とした Besprechen になっている。従って章全体としてはB-E-B-E-B という構成になっている。

### 2. 1. 3 Perf. — Prät.

このパターンにおける両時制の割合は次のとおり。

	Perf. : Prät.		
4章	4	:	9
11章	1	:	8
13章	9	:	1
27章	1	:	4
29章	1	:	2

ここにおいても完了形の現われる箇所は、その数にかかわらず、大きな Besprechen のコンテキストになっている。これに対して過去形の現われる箇所では、その数によって Erzählen の大小が決まる。4章と11章では、比較的まとまった Erzählen をはさんで、章の冒頭と最後に Besprechen がある。27章も大体においてB-E-Bの構成である。一方、13章と29章では章全体が Besprechen であり、途中過去形が孤立して現われる。

### 2. 1. 4 Prät. — Perf

両時制の割合は次のとおり。

	Prät. : Perf.		
12章	3	:	2
24章	1	:	1
33章	9	:	2

12章と24章では全体が Besprechen であり、過去形は孤立して現われる。33章ではE-Bという構成の中に両時制が組み込まれている。

## 2.1.5 その他

14, 17, 18章における両時制の数と分布状況は次のとおり。

14章	Perf.	:	Prät.	:	Perf.	:	Prät.
	5	:	1	:	4	:	4

17章	Perf.	:	Prät.	:	Perf.	:	Prät.	:	Perf.	:	Prät.
	1	:	1	:	1	:	6	:	1	:	10

18章	Perf.	:	Prät.	:	Perf.	:	Prät.
	1	:	1	:	1	:	32

この3つの章はすべてB-E-Bの構成になっている。Eを形成しているのはいずれも、上の表の右端に集まっている過去形である<sup>4)</sup>。

次に16章における両時制の分布と数を示す。

Perf.	:	Prät.	:	Perf.	:	Prät.	:	Perf.
1	:	14	:	1	:	3	:	2

ここでは、過去形あるいは完了形が孤立して現われることはなく、両者ともまとまった時制群の中に入っている。しかもこのBesprechenとErzählenが著しく交替している。そこで、16章の構成をもう少し詳しく検討してみたい。15章で農夫は次のように尋ねている。

1. Darumb weste ich gern, wer ir weret, was ir weret, wie ir weret, von wann ir weret und warzu ir tüchtig weret

「だから僕は知りたいんだ、おまえが誰で、何者なのか、どういう姿をしているのか、どこから来て、何の役に立っているのかを」

これに対して死神は、16章で順を追って答えている。つまり、16章は上の5つの質問に対する5つの答えで構成されている。この5つの答えの部分は、それらの冒頭の文によってはっきりと区分できる。すなわち 1. Du fragest, wer wir sein 2. Du fragest, was wir sein 3. Du fragest, wie wir

sein 4. Du fragest, von wann wir sein 5. Du fragest, warzu wir tüchtig sein である。これら冒頭の文によってはっきりと分けられた小部分は、それ自体完結した1つの章とみなすことができる。そして1, 2, 5の部分は全体がBesprechenであり, 3, 4の部分はB-E-Bという構成になっている。

## 2.2 過去形あるいは完了形が皆無の場合

### 2.2.1 一方が皆無の場合

これに該当する章は2, 6, 8, 10, 15, 22, 23, 25, 31, 32章である。このうち6章では完了形が皆無であり, 冒頭に5個の過去形が現在形と交錯して現われる。この冒頭部を除いては, 現在形を主体としたBesprechenである。6章以外はすべて過去形が皆無であり, 完了形を含んだBesprechenで終始している。

### 2.2.2 両時制とも皆無の場合

これに該当するのは1, 26, 28章である。1章はほとんどが接続法1式による要求語法であり, 26, 28章は現在形を中心としたBesprechenの章である。

これまでの考察をまとめると, 過去形と完了形はそれぞれErzählenとBesprechenのコンテキストに現われ, この両時制群はある程度大きなまとまりを持ち, 両者が著しく交替することは少ない。すなわち各章は, BまたはB-E-Bという構成をとる場合が多い。ただし, 過去形がBesprechenのコンテキストに現われる場合がいくつかあり, これについては次章で扱っていきたい。

3. 前章において, 過去形と完了形がある程度まとまって分布していることを見てきた。そういう中であって, とりわけ過去形がBesprechenのコンテキストに孤立して現われることがある。ここではその中のいくつかを, 動詞あるいは文の持つ性格から説明していきたい。

### 3.1 5章の冒頭に次のような文がある。

#### 2. Ja, herre, ich was ir friedel, sie mein amei.

「そうだ死神よ, 僕は彼女の愛する人, 彼女は僕の愛する人だった。」

2.1.2で述べたように, この文はBesprechenのコンテキストに入っている。現代語において, sein動詞が過去時制として過去形をとる傾向は, 一般に指<sup>5)</sup>的されている。『アッカーマン』におけるsein動詞は過去形が13個, 完了形が

1 個である。従ってここでも、sein 動詞が Sprechhaltung とは無関係に過去形をとる可能性を念頭に入れておくべきであろう。

3.2 次の文も Besprechen のコンテキストに入っている。

3. besserung kunde mir von euch nach großer missetat noch nie widerfahren.

「おまえはとてつもない悪事を働いておいて、その償いもまだできていないじゃないか。」(13章)

話法の助動詞においても過去形の頻度が高いことが指摘されている<sup>6)</sup>。『アッカーマン』における話法の助動詞は過去形が7個、完了形が0個である。このようなことから、上の例文においても、動詞の性質が時制を決定していると言える。

3.3 次の文を見られたい。

4. do du am ersten dein iöblich weib namest, fandest du sie frum oder machtest du sie frum?

「おまえが最初にそのあっぱれな妻をめとったとき、彼女がけなげであったのか、それともおまえが彼女をけなげにしたのかね。」(12章)

ここでは時を表す接続詞 do が用いられている。作品全体における do 構文の過去形と完了形の割合は24：2である。同じく時を表す wann 構文の場合は5：0である。このようなことから、do 構文と wann 構文は過去時制として<sup>7)</sup>過去形をとる傾向があると言える。従って do 構文は、18章のように大きな Erzähle をなすこともあれば、上の例文のように Besprechen の中に現われることもある。

3.4 次の文を見られたい。

5. Uns haben rechtfertig geteilet die Römer und die poeten, wan sie uns baß dann du bekanten.

「ローマ人や詩人たちはわしを公平だと認めてくれた。なぜなら、おまえよりも彼らの方がわしをよく知っていたからね。」(16章)

6. Wir westen nicht, das du als ein richtiger man werest.

「わしはおまえがこれほどりっぱな男だとは知らなかった。」(18章)

上の文で, bekanten (= kannten) と westen (= wußten) は変化を表わさない動詞である。現代語では, この種の動詞における過去形の頻度が比較的高い<sup>8)</sup>。例文 5, 6 の過去形も, 一応このような Aktionsart との関連で考えることができよう。また, wissen は verba sentiendi として過去形を好む傾向が指摘されることもある<sup>9)</sup>。もっとも, Hauser-Suida/Hoppe-Beugel は dialogische Rede における verba dicendi und sentiendi には完了形が多いとし, この種の動詞が過去形あるいは完了形になるさまざまな条件を挙げている<sup>10)</sup>。一方 kennen に関しては, Besprechen のコンテキストに完了形で現われる例もあり, ここでも wissen と同様, 動詞の性格が sein 動詞や話法の助動詞ほど強くは作用していないことがうかがわれる。

4. これまで, Sprechhaltung の観点から 2 大別された時制群の分布状況, およびそれぞれの時制群に属する過去形と完了形の分布状況を見てきた。それでは『アッカーマン』において, 今見てきたような時制の分布は何を意味するのであろうか。以下においては, 時制の用法から見た作品解釈を試みてみたい。

4.1 これまでの考察によると, 両時制群は B または B-E-B という分布を示すことが多い。そこでまず, B と E が交替する部分にどのような変化が起きているのかを, 作品に立ち入って検討してみたい。

4.1.1 B-E-B の構造が比較的きれいに出ているものとして, まず 11 章を取り上げてみよう。この章は農夫の陳述であり, 冒頭は次のような文で始まる。

7. Got, der mein und eur gewaltig ist, getraue ich wol, er werde mich vor euch beschirmen und umb die verwurkten übeltat, die ir an mir begangen habet, strenglich an euch gerechen.

「僕とおまえを支配する神がおまえから僕を守り, おまえが僕に行なった悪事に対して, きっとおまえに復讐してくれると僕は信じている。」

この箇所では農夫は, 自分をひどい目に会わせた死神に神が復讐するようにと訴えている。このあと, 彼はさらに死神への不満を訴え, 自分の不幸を嘆く。こうして Besprechen のコンテキストが続いたあと, 次のような文が過去形で

現われる。

8. Für alles we und ungemach mein heilsame erzenei, meines gutes dienerin, meines willens pflegerin, meines leibes auswarterin, meiner eren und irer eren tegelich und nechtligh wachterin was sie unverdrossen.

「どんな禍いと苦勞に直面しても、いつも彼女は僕のよく効く薬であったし、僕の財産に気を配り、僕の意を汲んでくれ、僕の体の心配をし、2人の名誉を昼も夜も守ってくれていた。」

このあと、過去形による Erzählen がさらに続いていくが、この箇所では農夫は、生前の妻の非の打ちどころのない行状を列挙する。そして章の最後には再び Besprechen に戻り、妻への恩寵を神に請う一方、死神を呪う。最後に述べる彼の言葉は、死神に対する怒りの激しさを表わしている。

9. Ach, ach, ach! unverschämter mörder, herre Tod, böser lasterbalg! Der züchtiger sei eur richter und binde euch, sprechend : vergib mir!, in sein wigen!

「おお、恥知らずな人殺しめ、死神よ、邪悪な悪党め。首斬り役人がおまえの裁き手となって、『許せ』と言いながらおまえを拷問台に縛りつけるがいい。」

4. 1. 2 B-E-Bの構成を持つ農夫の陳述においては、多かれ少なかれ上に述べたような内容が展開される。こうした農夫の訴えに対する死神の応答として、14章を取り上げてみよう。ここでも冒頭は Besprechen で始まる。

10. One nutz geredet, als mer geswigen, wan nach törlicher rede krieg, nach kriege feindschaft, nach feindschaft unrue, nach unrue serung, nach serunge wetag, nach wetage afterreue muß jedem verworren manne begegnen.

「むだ口たたくのなら、黙ってても同じだ。なんとなれば、愚かなおしゃべりのあとには争いが、争いのあとには憎しみが、憎しみのあとには騒乱が、騒乱のあとには流血が、流血のあとには苦痛が、苦痛のあとには後悔が、頭の混乱した男には誰にでも起こるものだからね。」



この箇所で死神は、農夫の発言がばかげた（törllich）もので無益な（one nutz）ことであるとし、そのようなことをするとあとで後悔するぞと警告している。このように農夫の激昂した話しぶりそのものをまず批判した上で、死神は話を続ける。

11. Du klagest, wie wir dir leid haben getan an deiner zumale lieben frauen. Ir ist gütlich und genediglich geschehen.

「おまえは、最愛の妻のことでわしがおまえをひどい目に会わせたと訴えておるが、彼女には好意からしてやったのじゃ。」

この箇所から、死神は当該の問題に対する弁明を行なう。彼は、マルガレータ殺害が彼女にとっては gütlich で genediglich なものであるとし、その正当性を主張する。これに続いて死神は、若い時期に死ぬのはよいことだといった彼自身の論理を展開していく。このような Besprechen が続いたあと、次のような過去形の文が現われる。

12. Des jares, do die himelfart offen was, an des himels torwertels kettenfeiertag, do man zalte von anfang der werlte sechstausend fünfhundert neun und neunzig jar, bei kindes geburt tausend vierhundert der selbigen, die seligen martrerin hießen wir raumen dis kurze schemende ellende, auf die meinung das sie solte zu Gotes erbe in ewige freude, in immerwerendes leben und zu unendiger rue nach gutem verdienen genediglichen komen.

「天国の門が開かれていた年、天国の門番聖ペテロ救済の日、天地開闢以来 6599 年を数えた年、同じくキリスト誕生以来 1400 年の年に、わしは神に召されたかの殉教者の女に、しかるべく神の意志を受け継ぎ、永遠の喜び、永遠の命、永遠の安らぎを賜わるべく、このはかない恥ずべき異郷の地を去るよう命じたのじゃ。」

この Erzählen の部分で死神は、彼が生前のマルガレータに対して死を命じたときのことを述べている。死神は彼女に対して、はかないこの世を捨てて、永遠の喜びと安らぎを得るようと言っており、ここにも死ぬことのよさを説く死神の姿がある。しかしこの部分は、あくまで過去形で描写された Erzählen

であり、先ほどの Besprechen とは違って、死神の弁舌の矛先は目の前の農夫に対して向けられてはいない。この Erzählen のあと再び Besprechen に戻り、死神は農夫に対する自分の態度を表明する。そして最後は、農夫に対する対抗意識をむき出しにする。

13. Sweig, enthalt! Als wenig du kanst der sunnen ir licht, dem mone sein kelte, dem feur sein hitze oder dem wasser sein nesse bene-men, als wenig kanstu uns unserer macht berauben!

「黙れ。おまえは太陽から光を、月から冷たさを、火から熱を、水から湿気を奪うことができないように、わしから力を奪うことはできんのじゃ。」

4. 1. 3 これまで11章と14章を取り上げ、農夫と死神の陳述に見られる B-E-B の構成を、陳述の内容に触れながら見てきた。weinrich は、B-E-B という Rahmenerzählung はとりわけ歴史記述と法廷弁論に特徴的なものだとしている。<sup>11)</sup> 審判者(神)の前で原告の農夫と被告の死神が論争するという形式をとっているこの作品の Rahmenerzählung は、従って次のように解釈されよう。すなわち、過去の事実を冷静にありのまま証言する箇所をはさんで、陳述の冒頭と最後の部分は、自分の意見を表明し、相手側の非を指摘する箇所である。これに対して Besprechen だけの章は、手をゆるめることなく、終始一貫して相手への応酬を行なう箇所である。

4. 2 これまで、Sprechhaltung という機能において異なる2つの時制群が『アッカーマン』において、B または B-E-B という構成上のまとまりをなしていることを観察してきた。こうした中において、過去形と完了形はどのように機能しているのであろうか。以下においては、具体的な陳述内容と両時制との関係を見ていきたい。

4. 2. 1 先ほど11章を取り上げ、例文7, 9で示したように、農夫は Besprechen しながら自分の不幸を嘆き、死神に対して怒りをぶつける。そうした中において、完了形の文の多くはほとんど同じ陳述内容を示している。その中のいくつかを挙げてみよう。

14. ir habt mir den zwelften buchstaben, meiner freuden hort, aus dem alphabet gar freissamlich enzücket. Ir habt meiner wünnen lichte sumerblumen mir aus meines herzen anger jemerlichen ausgereutet;

ir habt mir meiner selten haft, mein auserwelte tukeltauben  
arglistiglichen entfremdet ; ir habt unwiderbringlichen raub an mir  
geten !

「おまえは12番目の文字、僕の喜びの宝を、まったく恐ろしいことにアル  
ファベットから引き抜いてしまった。おまえは僕の喜びである輝く夏の花  
を、僕の心の草地から痛ましくも根こそぎにしてしまった。おまえは僕の  
幸せのよりどころ、僕の選んだきじばとを、陰険にも遠ざけてしまった。  
おまえは僕に対して、取り返しのつかない盗みを働いたんだ。」(3章)

15. verschwunden ist mein lichter leitestern an dem himel ; zu reste ist  
gegangen meines heiles sunne, auf get sie mir nimmermer ! Nicht  
mer get auf mein fluternder morgenstern, gelegen ist sein schein ;  
「空に輝く僕の導きの星は消えてしまった。僕の幸せの太陽は沈んでしま  
った。それはもう昇ることはないのだ。きらめく明けの明星はもう昇るこ  
とはない。その光は消えてしまったのだ。」(5章)

16. Bei Got, unvolsagenlich herzeleid ist mir geschehen, do mein züchtige,  
treue und stete hausere mir so snelle ist enzücket ; sie tot, ich  
witwer, meine kinder weisen worden sint.

「神かけて言うが、僕の貞淑で、貞節で、貞潔な家の名誉(=妻)が、か  
くもあっけなく引き去られ、彼女は死に、僕がやもめに、子供たちがみな  
しごになったとき、僕は言い尽くせぬ心の痛手を被ったのだ。」(21章)

上の例文はいずれも農夫の発言である。例文14では、死神が農夫からマルガ  
レータを奪ったということを、比喩的な言い方でもって表わしている。例文15  
も、同様に比喩的な表現であるが、ここでは彼女が消え去ったという言い方を  
している。例文16では、マルガレータの死によって子供はみなしごに、自分は  
やもめになって心に痛手を受けた旨を述べている。<sup>12)</sup>例文14～16のような遠回し  
な表現と違って、そのものをずばり述べたのが次の文である。

17. Ir habet sie alle und mein zarte ermordet ;

「彼ら(かつて生存していた人たち)はみんな、そして僕のやさしい人も  
おまえが殺したんだ。」(17章)

以上の例を見てもわかるように、妻に対する死神の殺人行為、およびそれによって生じた自分の不幸は、一貫して完了形によって表わされている。例文14, 15では修辭的な用法も相俟って、完了形の形式がいっそう際立って見える。このようなマルガレータ殺害に関する描写は、圧倒的に農夫の発言に多い。この完了形を用いることによって、農夫は矛先を死神に向け、彼を論破しようとするのである。

4.2.2 先に Erzählen の例として挙げた例文 8, 12 は、それぞれ農夫と死神の陳述であるが、両者とも生前のマルガレータに関係しているという点で共通している。また次に示す例文は、農夫がマルガレータとの幸福な結婚生活を回想している部分であり、直接彼女の姿は現われていないが、内容的には例文 8, 12 と同じタイプに属していると言えよう。

18. Frut und fro was ich vormals zu aller stund; kurz und lustsam was mir alle weile tag und nacht, in gleicher maße freudenreich, geudenreich sie beide; ein jegliches jar was mir ein genadenreiches jar.  
「以前は、僕はいつも陽気で朗らかだった。昼も夜も僕にとってはいつも短かく、楽しいものだった。昼も夜も同じくらい喜びに満ちていた。一年一年が恵み多きものだった。」(3章)

上の文のあと、

19. Nu wirt zu mir gesprochen: schab ab!

「今はどうかというと、『消えうせろ』といった言葉が僕に浴びせられる仕末だ。」

という文が続き、現在農夫が置かれている非惨な境遇が述べられていく。この場合、例文18の vormals と例文19の Nu という2つの対照的な語が、Sprechhaltung の変化を伴った時制の切り換えを際立たせている。ともあれ以上のように、生前のマルガレータに関わる事柄は過去形によって描写される。このことは、マルガレータの死を境にして、いわば別世界にいる彼女の姿が、もはや Besprechen の対象にはならないことを示している。

4.2.3 農夫がマルガレータ殺害の事実を、頻繁に完了形で描写していることは先に述べた。ところで、これとは対照的に、死神が頻繁に過去形で描写す

る事柄がある。それらは主として歴史上、伝説上の事柄や旧約聖書に関する事柄である。<sup>13)</sup> 2つだけ例を挙げよう。

20. Uns wunderte, do du keiser Iulium in einem rören schiffe über das wilde mer furtest one dank aller sturmwinde.

「おまえが皇帝ユリウスを葦の舟に乗せて、暴風をものともせずに荒海を渡っていったとき、わしは驚いた。」(18章)

21. Da tirmete uns Got und nante uns mit unserem rechten namen, do er sprach zu dem ersten menschen: Welches tages ir der frucht enbeißet, des todes werdet ir sterben.

「そこで神はわしを作り、正式に名付ける一方、世界最初の人間に対しては、汝がこの果実を食べた日に汝は死ぬのだと言い渡した。」(16章)

この種の死神の発言には、歴史上の人物と農夫がやりとりをするという架空の話も多く、Erzählenの時制としての過去形の機能が発揮されている。とりわけ18章では、死神は広範なErzählenの中で、農夫のあずかり知らぬ話を次々と持ち出し、興奮している農夫に肩透かしを食わせ、彼を煙に巻こうとする。言い換えれば、死神は異なったSprechhaltungをとることによって、農夫と四つに組んで戦うことを意図的に避けようとする。これに対して農夫は、マルグレータ殺害の事実をあくまで完了形で描写しながら論戦を挑む。このように、激昂する農夫と冷ややかに対応する死神という対照的な2つの人物像は、完了形と過去形という過去時制の使い方にも垣間見ることができよう。

以上、『アッカーン』における時制の分布を手がかりに、とりわけ過去時制の持つSprechhaltungの機能がどのように発揮されているのかを考察した。3.でも若干試みたが、テキストのレベルから目を転じ、個々の文において時制を左右する条件を考察することは、今後の課題として残しておきたい。

#### [注]

- 1) 使用テキストは Johannes von Tepl: Der ackerman, hrsg. v. Willy Krogmann, Wiesbaden 1978.
- 2) Weinrich, H.: Tempus. Besprochene und erzählte Welt, 3. Auflage, Stuttgart 1977 S. 18.

- 3) Weinrich, S.33.
- 4) 14章の場合、右端の過去形のうち、1つは Besprechen の中に孤立して現われたもので、Erzählen をなすのは残りの3個である。また、17章に6個ま  
とまって現われる過去形は、いずれも現在形主文に従属する関係文であり、  
Erzählen としてのまとまりをなすには至っていない。
- 5) Hauser-Suida, U./ Hoppe-Beugel, G.: Die Vergangenheitstempora in  
der deutschen geschriebenen Sprache der Gegenwart (=Heutiges  
Deutsch I/4), München/Düsseldorf 1972, S.138 および Latzel, S.: Die  
deutschen Tempora Perfekt und Präteritum (=Heutiges Deutsch III  
/2), München 1977, S.84 ~ 87.
- 6) 同 上
- 7) 現代語において、時を表わす als 構文が過去形をとる傾向については  
Wunderlich, D.: Tempus und zeitreferenz im Deutschen (=Linguistische  
Reihe 5), München 1970, S.148 および Latzel, S.90 参照。
- 8) Latzel, S. 87 参照。
- 9) Latzel, S. 86
- 10) Hauser-Suida/Hoppe-Beugel, S.104 ~ 119
- 11) Weinrich, S. 65 ~ 68
- 12) 例文16には既述の do 構文が現われるが、完了形になっている。Besprechen  
の強さがこのことからもうかがわれる。
- 13) 歴史上、伝説上の事柄や旧約聖書に関する事柄ならば、必ず過去形になる  
というわけではない。時制を左右するのは陳述内容ではなく、あくまで  
Sprechhaltung である。従って歴史上、伝説上の事柄であっても、Bespre-  
chen のコンテキストに現われれば、たとえば例文5のように完了形になる。

YASUHIRO KUDO

1. H. Weinrich teilt die Tempora unter dem Gesichtspunkt der Sprechhaltung in zwei Teile: besprechende und erzählende Tempora. Mit den besprechenden Tempora fordert der Sprecher vom Hörer das gespannte Zuhören. Mit den erzählenden Tempora dagegen kann der Hörer ruhig zuhören. In dieser Abhandlung habe ich den Gebrauch des Perfekts, eines besprechenden Tempus, und des Präteritums, eines erzählenden Tempus, im "Ackermann aus Böhmen" vor allem vom Gesichtspunkt der Sprechhaltung untersucht.

2. "Der Ackermann aus Böhmen" ist in 33 Kapitel unterteilt. Ich habe zuerst die Distribution des Perfekts und Präteritums in einzelnen Kapiteln untersucht. Daraus hat sich ergeben, daß die beiden Tempora selten miteinander stark wechseln, sondern jedes Tempus als Gruppe vorkommt. Das gilt auch für die besprechende und erzählende Tempusgruppe. Die Distribution der beiden Tempusgruppen ist in den meisten Kapiteln B-E-B (= Besprechen-Erzählen-Besprechen) oder nur B. Auch Perfekt und Präteritum erscheinen meistens in dieser Form.

3. Einige der Präteritumsätze, die scheinbar ausnahmsweise in der besprechenden Tempusgruppe isoliert auftreten, hängen von einer besonderen Eigenschaft der bestimmten Verben oder Sätze ab. Das gilt vor allem für sein-Verben, Modalverben und temporale do- und wann-Sätze. Im "Ackermann aus Böhmen" ist das Verhältnis vom Präteritum und Perfekt bei sein-Verben 13:1, bei Modalverben 7:0, bei do-Sätzen 24:2, bei wann-Sätzen 5:0. Diese Verben und Sätze haben die Tendenz, auch im besprechenden Kontext im Präteritum aufzutreten.

4. Im "Ackermann aus Böhmen", der in der Form des Streitgesprächs geschrieben ist, läßt sich die Komposition B-E-B folgendermaßen

interpretieren: zwischen den beiden Stellen, wo man seine Meinung vorbringt und seinen Gegner des Falschen bezichtigt, liegt eine Stelle, wo man eine vergangene Tatsache ruhig aussagt. In der Komposition B dagegen greift man konsequent seinen Gegner ohne nachzugeben an. Ich habe dann die Funktion des Präteritums und Perfekts in diesem Werk eingehend untersucht. Folgende drei Sachlagen stehen mit der Tempuswahl in Beziehung:

1. Die Ermordung der Frau Margaretha vom Tod
2. Ereignisse zu Lebzeiten der Frau Margaretha
3. Historische und sagenhafte Ereignisse

Die Ermordung der Frau Margaretha wird im Perfekt geschildert. Und zwar wird sie oft vom Ackermann erwähnt. Der Ackermann äußert nämlich mit diesem besprechenden Tempus seinen Zorn gegenüber dem Tod. Ereignisse zu Lebzeiten der Frau Margaretha werden im Präteritum geschildert. Seit ihrem Tod ist Margaretha in einer andern Welt da, kann daher nicht mehr zum Gegenstand der Besprechung werden. Historische und sagenhafte Ereignisse werden im Präteritum geschildert. Sie werden oft vom Tod erwähnt. Der Tod bringt nämlich mit diesem erzählenden Tempus diejenigen Erzählungen einer nach dem anderen vor, die Der Ackermann gar nicht kennt, und weicht auf diese Weise den Angriffen des Ackermanns aus. So erkennt man am Tempusgebrauch zwei verschiedene Personen: den aufgeregten Ackermann und den kalten Tod.